

岡谷市教職員研修会について

学びの創生・連携支援室 村松

7月24日（木）に行われた岡谷市教職員研修において、福井大学の木村優先生より「わたしたちのウェルビーイングを見つけ高める ～よりよさにむけた作戦会議～」というテーマでお話をいただきました。本資料 NO1-①は講演の概要をまとめたものです。詳細は資料 NO1-②をご覧ください。

木村 優 先生(福井大学大学院連合教職開発研究科)講演記録【概要】

現代社会の状況と教育への影響

まず、現代社会がどのような状況にあるか、そしてそれが教育にどう影響しているかについてお話しします。

新しい社会の到来:VUCA と Society 5.0

私たちは現在、VUCA (Volatility, Uncertainty, Complexity, Ambiguity) と呼ばれる、**変動的で、不確実で、複雑で、曖昧な世界**に生きています。また、社会は「Society 5.0」という「超スマート社会」に突入しています。

- これまでの社会の変遷は、狩猟社会(1.0)から農耕社会(2.0)、工業社会(3.0)、情報社会(4.0)を経てきました。
- 学校教育の仕組みは工業社会の時代にできた名残があり、現代の社会変化のスピードに追いつけていない部分があると考えています。
- Society 5.0 では、AI、IoT、ロボット、ドローンなどが活用され、私たちの生活を豊かにする可能性を秘めています。
 - 実際に、AI 技術に関する特許数は 1995 年以降急増しており、AI が私たちの世界に深く浸透していることが分かります。
 - 一方で、オックスフォード大学の研究では、AI やロボットによって多くの職業が置き換えられる可能性が示唆されていますが、教師は置き換えられにくい職業の上位に位置づけられています。
- さらに、基礎研究が終わり応用段階に入っている**量子科学技術**は、超高速データ処理や医療、エネルギー分野で非連続的な課題解決をもたらし、「技術的特異点(シンギュラリティ)」の到来、つまり人類の知能が人工知能に超えられる可能性を示唆しています。



グローバル化と課題の多様化

世界はグローバル化によって、人々の移動が活発になり、多様な文化を持つ人々が共に暮らす時代になっています。

- これに伴い、在留資格を持つ外国人の労働者も増加しており、多様な人々との共生が求められています。
- また、気候変動による自然災害の増加も顕著です。記録的な高温、山火事、豪雨、豪雪など、命の危険が迫る状況も多く、私たちの身体的なウェルビーイングにも影響を与えています。
- 新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の世界的流行は、わずか数年で世界中に広がり、私たちの生活に甚大な影響を与えました。これはグローバル化が進んだ現代社会の脆弱性を示しており、今後も新たなパンデミックへの覚悟が必要です。
- さらに、コロナ禍で「ギグ・エコノミー」のような新しい経済形態が発展しましたが、これは社会格差や分断といった問題も引き起こす側面を持っています。



VUCA な世界で求められる力

このような VUCA な世界では、私たちは「自ら考え、考え抜き、適切な判断を行い、それを他者や社会に表現できる力」が非常に重要になります。これは子どもたちにも同様に求められる力です。



自ら考え、考え抜き
VUCAな状況で適切な判断を行い
そうした考えや判断を他者・社会に表現できる

グローバル教育改革運動(GERM)の影響

現代の教育に大きな影響を与えているのが、
1990年代から現在まで続く「グローバル教育改革運動(GERM)」です。

1990年代～現在
グローバル教育改革運動
GERM
(GLOBAL EDUCATION REFORM MOVEMENT)



1995年～
国際数学・理科教育調査 TIMSS (Trends in International Mathematics and Science Study)
対象 小学校4年生・中学校2年生
内容 学校で習う数学(算数)・理科の内容理解の程度を測定する



2000年～
生徒の国際学習到達度調査 PISA (Programme for International Student Assessment)
対象 15歳3ヶ月～16歳2ヶ月(中学校3年生)
内容 学校で習う数学・読解(国語)・科学の知識・スキルの活用能力(リテラシー)を測定する



2007年～
全国学力・学習状況調査
対象 小学校6年生・中学校3年生
内容 国語・数学(算数)・理科(3年に1度)、英語(2019年、中学生のみ)

- 国際的な学力テストの普及:
 - TIMSS(国際数学・理科教育調査、1995年～): 数学・理科の基礎理解度を測定。日本の子どもたちの高い学力が注目され、「授業研究」が国際的に「Lesson Study」として知られるきっかけとなりました。
 - PISA(生徒の国際学習到達度調査、2000年～): 数学、読解、科学の知識・スキル活用能力(リテラシー)を測定。
 - 全国学力・学習状況調査(日本、2007年～): TIMSS や PISA の影響を受け、日本でも全国規模の学力テストが復活しました。
- 特定教科への集中と競争の激化:
 - これらの国際学力テストの結果により、各国政府や自治体は、国語(読解)、数学(算数)、(時々)科学(理科)の成績向上に教育上の努力と投資を集中するようになりました。
 - その結果、国家間、地域間、学校間のランキング比較と競争が激化し、標準化されたテストへの対応が教育の目的と化してしまう問題が生じました。
- 「学習化(Learnification)」の問題:
 - 教育学者のビースタ(Biesta, 2010)は、この「学習化」の動きに警鐘を鳴らしています。
 - 「学習」という言葉が個人主義化しやすく、GERM の状況も個人の点数や学校・地域の比較に終始しがちであると指摘されています。
 - これにより、教育そのもののプロセス、特に教育実践における「関係性」の重要性への関心が薄れてしまうのです。
 - 本来、教育には「有能化(Qualification)」「社会化(Socialization)」「主体化(Subjectification/Agency)」という3つの重要な目標があることを再認識すべきです。

グローバル教育改革運動 GERM

2、3の特定教科(国語・算数数学ときどき科学(理科))の

学びに焦点化

→ 学習化 Learnification という問題提起 (Biesta, 2010)

- 「学習」という言葉は個人主義化しやすい＝GERMもまた学習の個人主義化を助長してしまう
→教育そのもののプロセス、あるいは教育実践の中での「関係性」の重要性への関心を減らす
→教育の3つの目標：有能化・社会化・主体化の重要性

ウェルビーイングの時代へ

VUCA な状況と GERM の影響が重なる中で、私たちは「子どもたちのウェルビーイング」に真剣に目を向けるようになりました。

コロナ禍で露呈した子どもたちの「イルビーイング」

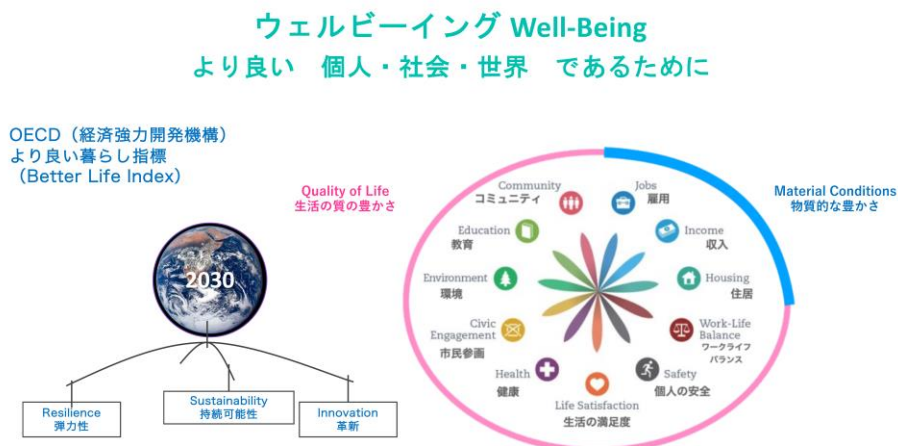
コロナ禍は、私たちの生活、特に子どもたちの学びの環境を大きく変えました。



- 「ステイ・ホーム」による自宅学習や学校閉鎖は、子どもたちに以下のような困難をもたらしました。
 - 一人で学ぶことの困難さ、保護者のサポートが得られない、デジタル機器へのアクセスができない、多すぎる課題に追われる、重いランドセルを背負わされる、先生との関係に悩む、一発勝負のテストや受験に不安を感じる、受け身の授業を強いられるなど。
- これらは子どもたちの「イルビーイング (ill-being)」、つまりウェルビーイングではない状態を浮き彫りにしました。

ウェルビーイングとは何か

- OECD「より良い暮らし指標 (Better Life Index)」: ウェルビーイングを「物質的な豊かさ」だけでなく、「生活の質の豊かさ (Quality of Life)」を含む 11 の指標で測っています。
 - 日本は経済大国ですが、この指標で見ると、「住居」の狭さや、特に「市民参加意識 (Civic Engagement)」、例えば (選挙の投票率の低さ) が顕著であり、ウェルビーイングを高める余地があることが分かります。市民参加意識の向上は、社会をより良くするための行動を促す上で非常に重要です。
- 国連 SDGs や WHO のウェルビーイングアジェンダも、持続可能な社会の実現や健康増進において、ウェルビーイングが中心にあることを示しています。



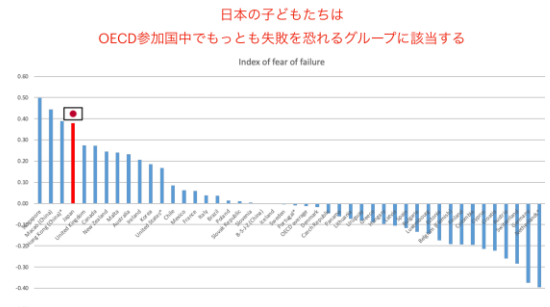
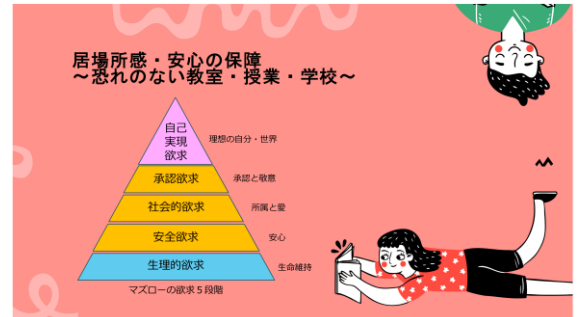
ウェルビーイングにむけた作戦:理論的枠組み

学校の中で、授業の中で、子どもたちのウェルビーイングをどのように保障し、高めていくか。そのための「作戦」を考える上で、いくつかの理論的な枠組みが参考になります。

1. マズローの欲求階層説

人間には5段階の欲求があり、これらが満たされることで上位の欲求へと向かうという理論です。

- ・ 生理的欲求(生命維持): 食事、睡眠など。
- ・ 安全欲求(安心): 身体的・精神的な安全の確保。
- ・ 社会的欲求(所属と愛): 集団への所属感や他者からの愛情。
- ・ 承認欲求(承認と敬意): 他者から認められ、尊重されること。
- ・ 自己実現欲求(理想の自分・世界): 自己の可能性を最大限に引き出し、理想を追求すること。
- ・ 学校での応用:
 - まず、「恐れのない教室・授業・学校」を作り子どもたちが安心して学べる環境を保障することが重要です。
 - PISA 2018 のデータでは、日本の小中学生は OECD 参加国の中で最も「失敗を恐れる」グループに属しています。これは、一発勝負の受験社会や、失敗が許されないというプレッシャーが背景にあると考えられます。しかし、失敗への恐怖と学力向上は必ずしも相関しないというデータもあります。
 - 心理的安全性(Psychological Safety)を育むことで、子どもたちが安心して失敗し、そこから学べる場を提供することが求められます。



2. 成長マインドセット(Growth Mindset)

「自分自身の基本的な資質は、自らの努力によって成長させることができる」という信念を「成長マインドセット」と呼びます。

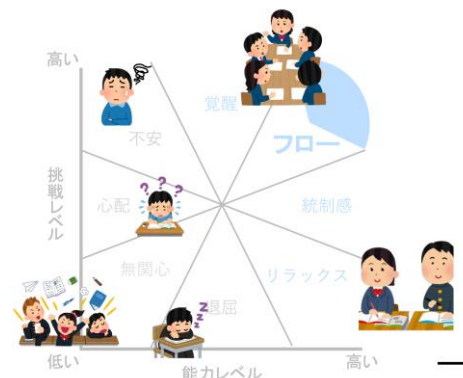
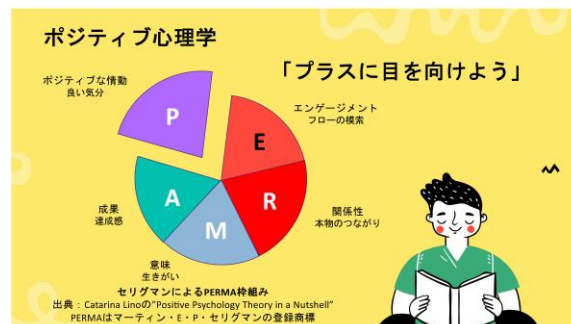
- ・ 対して、「いくら努力しても変わらない」と考えるのは「固定マインドセット」です。
- ・ 子どもたちの成長マインドセットを高めることは重要ですが、単に褒めるだけでは不十分であり、家庭や学校、社会といった環境との関係性も考慮に入れる必要があります。



3. ポジティブ心理学(PERMA)

マーティン・セリグマンが提唱した PERMA モデルは、ウェルビーイングを構成する 5 つの要素を示しています。

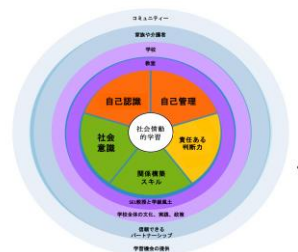
- Positive Emotion(ポジティブな情動・良い気分)
- Engagement(エンゲージメント・フローの模索)
 - フロー(Flow)とは、活動の挑戦レベルと自己の能力レベルが高い値で均衡したときに生じる「最適経験」であり、没頭、自己統制感の高まり、創造性の発揮など、学習にプラスの効果をもたらします。子どもたちがフロー状態に入れるような活動をデザインすることが重要です。
- Relationships(関係性・本物のつながり)
- Meaning(意味・生きがい)
- Achievement(成果・達成感)
- ポジティブな側面に目を向けることで、より豊かで良い人生を送ることができるという考え方です。



4. 社会情動的学習(SEL: Social Emotional Learning)

自己管理、自己認識、責任ある判断力、関係構築スキル、社会意識という 5 つの核となる能力を育む学習です。

社会情動的学習



- 特に「ゾーンの調整」や「自己管理・自己調整」が重要であり、映画「インサイド・ヘッド」のように自分の感情を理解し調整する取り組みもウェルビーイングの枠組みで実践されています。
- 内発的動機づけを高める鍵として、「自己決定」「有能感」「関係性」の 3 つが挙げられます(Deci & Ryan, 2002)。
 - **自己決定の保障**: 子どもたちが学習課題や方法などを自ら決定する機会を保障すること。しかし、OECD のデータでは、日本の小中学生は学校生活満足度が高い一方で、自己決定の機会が OECD 加盟国中最も少ないことが示されています。
 - **有能感の価値づけ**: 子どもたちが「自分には能力がある」と実感できる機会を、対話や励ましを通じて保障すること。
 - **関係性の保障**: ペア・グループ学習や地域活動など、他者と関わる機会を保障すること。

子どもたちと教師のウェルビーイングを高める

これらの理論を踏まえ、子どもたちと大人が共にウェルビーイングを高めていくことが重要です。

子どもたち・若者たちとの学習パートナーシップを再考する



・ 子どもたち・若者たちとの学習パートナーシップの再考:

- OECD の「共同エージェンシーの太陽モデル」は、子どもたちと大人がいかに協力し、子どもたちが主体性を発揮できるかを示しています。
- このモデルのメッセージである「光は、私たちが共に輝くときに最も鮮やかになる (The light is brightest when we shine together.)」は、子どもたちから大人への、共に輝きたいという願いを表しています。

・ 教師自身のウェルビーイングを高める:

- 新たに公開された OECD の「ティーチング・コンパス (Teaching Compass)」は、**教師が変化の波を乗り越えるための「強固な自己概念」を「錨」として中心に据えています。**
- コンパスには、教師の「Being (どういう状態か)」「Belonging (何に属しているか)」「Becoming (どうなりたいか)」という3つのBが示されており、私たち教師自身がウェルビーイングを探求し、高めていくことの重要性が示唆されています。

今回の講演を通して、先生方が子どもたちと学校のウェルビーイングを高めるために、明日からどのようなことを始められるか、考えるきっかけとなれば幸いです。

わたしたち自身のエージェンシーを見つける

Q 子どもたちと学校のウェルビーイングを高めるために明日からどんなことをはじめられそうですか？

Co-Reflection for Tomorrow

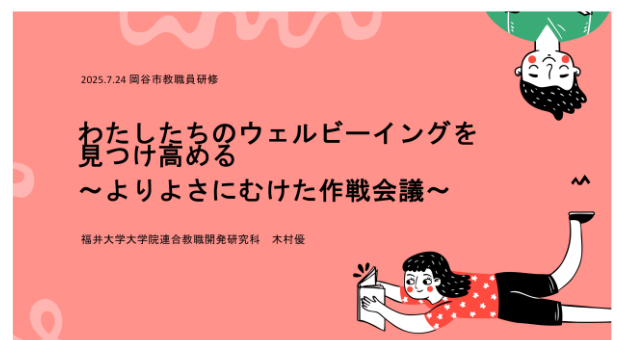


講演記録

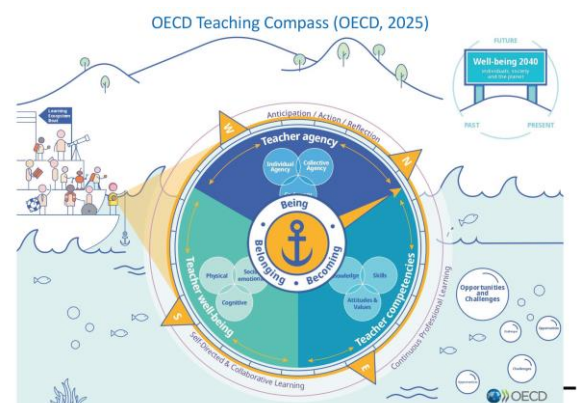
講演者紹介: 先生のご講演へと移ります。木村先生は福井大学院連合教職開発研究科教授でいらっしゃいます。授業研究、教職専門研究、学校組織改革研究、探求型カリキュラム実践研究を主な専門領域とされ、専門職の学び合いによる学校づくりの研究と実践を深めてこられました。岡谷市でも一昨年、木村先生にお越しいただき、この教職員研修にて大変意義深いご講演をいただきました。本日の教職員研修のテーマは「踏み出せ 明日への一步」でございますので、ご参加の皆様の元気が出るお話をお願いしたいとご依頼したところ、「私たちのウェルビーイングを見つけ高める～よりよさに向けた作戦会議～」という素敵なお講演内容をご提示いただきました。それでは木村先生、よろしくお願いいたします。

講演者(木村優先生): 皆様、おはようございます。

福井大学の木村と申します。今回もこの研修にお招きいただき、心より感謝申し上げます。まさに一学期が終わって夏休みに入ったところですが、これからのことを踏まえて、どのように子どもたちや同僚の先生方、地域の方々と教育活動を展開していくかという大きな機会です。特に長野県がウェルビーイングを大事にした事業をスタートさせ、岡谷市も川岸学園をはじめとしてウェルビーイングに関するチャレンジを始めたといいましたので、今回ウェルビーイングをテーマに情報提供のスライドを準備しました。幼稚園、保育園から中学生、高校生までの子どもたちがよりよく生きるために、学校教育の中のウェルビーイングをどう高め、あるいはデザインしていくかということが大きなテーマになるかと思います。ウェルビーイングという言葉は馴染み深いかと思いますが、概念自体は昔からあるものですので、その点も確認させていただきます。



最初に、OECD の教育スキル局が 2015 年から進めているプロジェクトで、2018 年、2019 年頃に「ラーニングコンパス 2030」という学びの羅針盤をリリースし、これからの教育の進む方向や子どもたちの学び方を示しました。そこではエージェンシーや変化する力など様々な概念が提示され、日本の学習指導要領の検討にも繋がっています。この 6 月末に、ラーニングコンパスとついでに「ティーチングコンパス」がリリースされました。これは情報提供として後ほど扱いますが、教師たちがどのように教育活動をデザインし、さらに踏み込んでカリキュラムをどれだけ子どもたちの学び、エージェンシー、ウェルビーイングを高めるために自律的にデザインしていくか、そのためのコンパスだとされています。右上に「ウェルビーイング 2040」とあり、ラーニ



ングコンパスが 2030 年のウェルビーイングを目指すものであったのに対し、ティーチングコンパスは 2040 年のウェルビーイングを目指していく、というものです。

2040 年のウェルビーイングを目指すために、このコンパスをうまく使ってくださいというものがリリースされました。この文書は英語ですが、生成 AI などを活用すれば簡単に翻訳できますので、関心のある方は「ティーチングコンパス 2040」で検索してダウンロードしてください。このコンパスには 3 つの枠があります。上が教師のエージェンシーに関するもの、右下が教師の資質・能力（ティーチャーコンピテンシー）、そして左下が今回のテーマでもある教師のウェルビーイングをどう保障するかというセクションです。ぜひ読んでいただきたいです。この文書には教師の知識に関するセクションがあり、非常に興味深い内容でしたので、共有させていただきます。教師にとって基本的な知識は、もちろん学問の知識、教科の専門知識、カリキュラムの知識、教育方法の知識、そして学びのフィードバックに関する知識などが挙げられます。

さらに、これから重要性を増す知識として示されているのが、学習者の知識、つまり人どのように学ぶかという学習科学の知識です。私たちは経験的に知っていても、学術的な研究で判明していることも多く、これらはさらに重要性を増すでしょう。また、昨今のデジタル社会を踏まえたデータの扱い方、データの読み解き方に関する知識、そして生成 AI に関する知識も挙げられています。さらに、認識論的知識 (Epistemic knowledge) も重要です。これは知識の起源を知ることで、例えばウェルビーイングという言葉がどこから出て来たのかを知ることで、その意味や使い方がより深く理解できるというものです。そして、自己の知識や脳科学の知識も挙げられています。

脳科学とは、自分自身を知る心理学的な知識と、脳がどのように動き、人の感情や思考を司っているのかという知識です。これらは学習に深く関わります。さらに、学際的な知識も重要です。学校の学習内容と地域を繋ぐような知識で、総合的な学習や探究の時間、あるいは新しい学問分野が生まれていることを考えると、学際的な知識が先生方にとってさらに重要になるでしょう。一度に全てを習得することは難しいですが、このような知識がこれから重要になるという認識を持つことが大切です。そして、もう一つ私が注目しているのが「世界の知識」です。報道を見てもわかるように、世界的グローバル化の繋がりを非常に強く感じます。例えばコロナウイルスの流行もグローバル化の拡大によるものですし、トランプ大統領の関税の話など、世界は密接に繋がっています。こうした世界の知識をしっかりと身につけることで、子どもたち一人ひとりと教室での学びが変わっていくでしょう。前段として世界の知識を共有してからウェルビーイングの話に入りたいと思います。

今、世界は VUCA ワールドと呼ばれています。VUCA は Volatility (変動性)、Uncertainty (不確実性)、Complexity (複雑性)、Ambiguity (曖昧性) の頭文字を取ったものです。私たちは今、まさに不安定で確実なものがなく、複雑に絡み合う中で曖昧な世界に生きています。これが世界を見る一つの目です。そして、現在の社

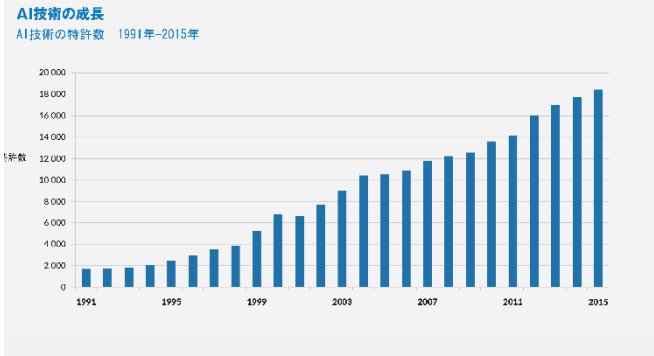
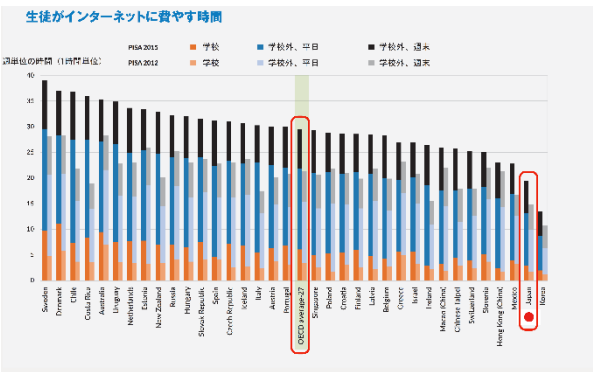
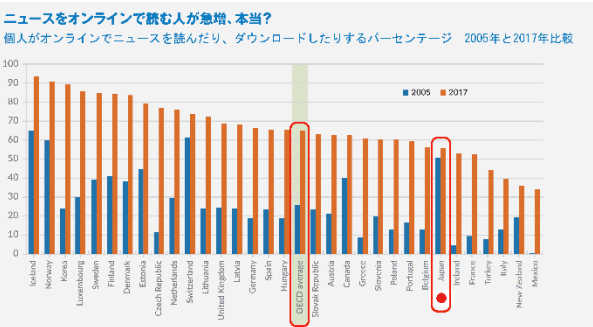


会は「Society 5.0」という社会に入っています。Society 1.0 はマンモスを狩る狩猟社会、Society 2.0 が定住と農耕の社会、Society 3.0 が蒸気機関の発明による工業社会、そして私たちが生きてきた Society 4.0 がコンピューターの登場による情報社会です。Windows 95 のリリースにより、一人ひとりがコンピューターを手にする時代となり、さらに小型化が進みました。そして現在、Society 5.0 という超スマート社会に突入しています。AI、IoT (Internet of Things)、ビッグデータ、ロボット、ドローンなどが活用され、私たちの生活を豊かにする可能性を秘めています。

それぞれの社会には、その時代に求められる力に合わせた教育がありました。学校教育は工業社会の時代にできたものが名残としてあり、現代の社会変化のスピードに追いついていない部分があります。私たちは社会変化に応じてけっこう早く変わっていかないと取り残されてしまいます。

Society 5.0 では、コンピューターが様々なものに繋がり、ロボットやドローンが生活を豊かにします。実際にデジタル化は進んでおり、OECD のデータによると、2005 年と 2017 年を比較すると、世界中でニュースをオンラインで見る人が増えています。日本は 2005 年からオンラインニュースの利用者が多かったため、他国ほどの伸びはありませんが、このデジタル化は世界の知識を反映しています。学校でのインターネット利用時間も見てみましょう。学校内外でのインターネット利用時間を見ると、OECD 加盟国の平均と比較して、日本の子どもたちは学校でインターネットをあまり利用していなかったことがわかります。しかし、スウェーデンなど他国では利用が大幅に増えていました。現在は日本でも利用が当たり前になっているでしょう。

産業革命、特に第 4 次産業革命や科学革命が進展し、AI 技術の発展は著しいです。AI 関連の特許数は 1995 年以降急増しており、AI が私たちの世界に深く浸透していることを示しています。Society 5.0 は私たちの生活を豊かにする可能性を秘めている一方で、コンピューターや AI、ロボットとの関係を再考する必要があります。オックスフ



オード大学の研究では、66%以上の高い確率で AI やロボットに置き換えられる職業が示唆されています。レジ係など、すでに自動化が進んでいる職業もあります。これは社会の変化であり、人口移動にも繋がります。しかし、その一方で、AI やロボットに置き換えられにくい職業の筆頭として、小学校の先生が挙げられています。教師の仕事は AI やロボットでは代替できない。現在、学校教育では生成 AI の扱い方も議論されていますが、すでに授業で活用している先生方も多数います。

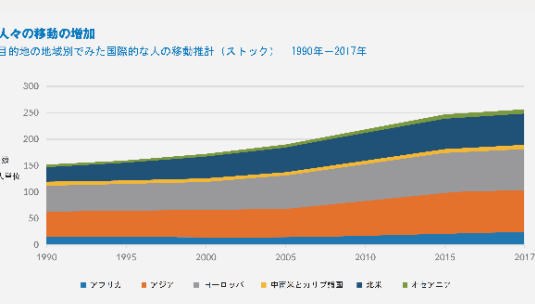
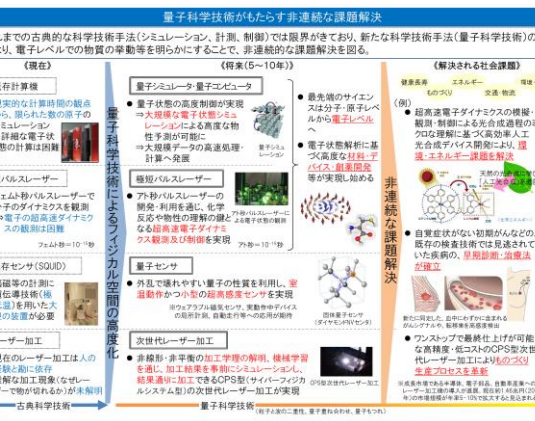
さらに、もう少し先の未来として量子科学技術の発展があります。基礎研究が終わり応用段階に入っており、生活や社会への実装段階にきています。デジタルが 0 と 1 で情報を処理するのに対し、量子は回転するイメージで情報を処理するため、単純計算で 4 倍以上の処理速度が見込まれるそうです。これにより、テクノロジーの性能が飛躍的に向上し、これまで不可能だったことが可能になります。量子科学技術の発展により、量子シミュレーターや量子コンピューターが実装され、超短パルスレーザーや次世代レーザー加工などが実現し、医療やエネルギー分野などで非連続的な課題解決が可能になります。私たちの暮らしは量子科学によって大きく変わっていくでしょう。これは技術的特異点(シンギュラリティ)とも呼ばれ、人間の知能が人工知能に超えられる可能性を示唆しています。何が起るかわからないままに予測できませんが、私たちはドラえもんの世界のような未来に生きていると考えるべきです。これは空想科学の話ではありません。

次に、グローバル化についてです。人々の移動が年々世界中で増加しています。アジアやヨーロッパでの人の移動がデータで確認されており、多様な文化を持つ人々が多様な場所で暮らし、繋がりが深まっています。在留資格を持つ外国人の労働者数も、コロナ禍で一時横ばいになったものの、全体としては右肩上がりに増加しています。岡谷市でも外国籍の方が増えているでしょう。こうした多様な人々と共に暮らし、教育活動を展開することは、私たちにとって大きな挑戦です。

グローバル化のもう一つの側面は気候変動の問題です。温暖化が進む中で、1980 年代頃から世界の自然災害が増加しています。これは私たちの命に危険が迫っていることを意味し、身体的なウェルビーイングにも影響を与えます。今年の 6 月末には長野県で 34℃、北海道帯広で 40℃を記録するなど、非常に暑く、燃えるような世界に私たちは生きてい

現代ビジネス「オックスフォード大学が認定 あと10年で『消える職業』『なくなる仕事』」
<https://gendai.ismedia.jp/articles/-/40925>

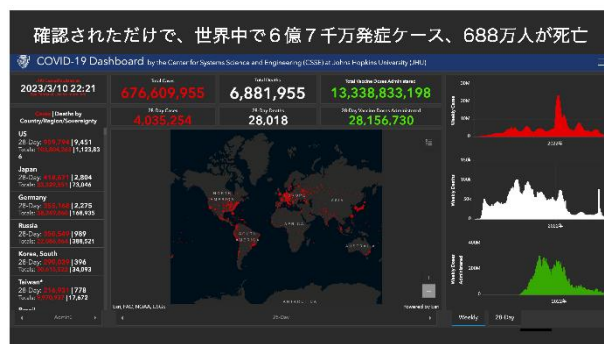
主な「消える職業」「なくなる仕事」	
銀行の融資担当者	図書館員の補助員
スポーツの審判	データ入力作業員
不動産ブローカー	彫刻師
レストランの店内係	香煙の地理・調査担当者
保険の営業担当者	簿記、会計、監査の事務員
動物のリーダー	検査、分類、見本採取
電話オペレーター	測定を行う作業員
給与・福利厚生担当者	映写技師
レジ係	カメラ、撮影機材の修理工
郵便施設の案内係、チケットもぎり係	金融機関のクレジットアナリスト
ガソリンのディーラー	メカニクス、コンタクトレンズの技術者
ネーリスト	昆虫標本の調査、販布の技術者
クレジットカード申込書の承認・調査を行う作業員	書籍制作技術者
美容師	測量技術者、地図製作技術者
パティリー・ガール、葬儀士助手	造園・用務管理の作業員
ホテルの受付係	建設現場のオペレーター
電話販売員	訪問販売員、路上新聞売り、露店商人
仕立屋(手縫い)	塗装工、装飾係り職人
時計修理工	
税務申告書代行者	



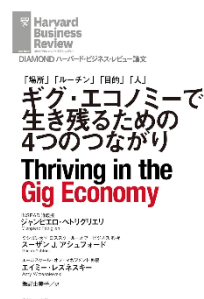
ます。ハワイの山火事やロサンゼルス森林火災なども記憶に新しいでしょう。豪雨や豪雪も増え、福井では財政が破綻寸前になるほど除雪費用がかかりました。



このようなグローバル化の中で、新型コロナウイルス感染症が世界中に蔓延しました。ジョンズ・ホプキンス大学のコロナダッシュボードは 2023 年 3 月 10 日で更新が止まっていますが、その時点で世界中で 6 億 7 千万件の発症が確認され、688 万人が死亡しました。SARS や MERS もコロナウイルスの一種ですが、2000 年代初頭には抑え込めていたものが、2019 年には抑え込めずに一気に世界中に広がりました。これは、第一次世界大戦中のスペイン風邪と同様、グローバル化がパンデミックを加速させた一例です。私たちは次のパンデミックに備えなければなりません。



新型コロナウイルスは、今後も新たなパンデミックとして発生する可能性があります。日本であまり馴染みがなかった「ギグ・エコノミー」もコロナ禍で発展しました。Uber や Amazon など、短時間の仕事で収入を得るギグ・エコノミーは、社会の新しい展開をもたらしましたが、同時に社会福祉の不安定化や社会格差、分断といった問題も引き起こしています。このように、現代社会は変動的で不確実、複雑、そして曖昧な VUCA の世界です。この中で何がどう繋がっているのか、どう振る舞うべきかを「自ら考え、考え抜き、適切な判断を行い、それを他者や社会に表現できる力」が、私たち大人にも子どもたちにも非常に重要になります。



次に、「グローバル教育改革運動(GERM)」についてご紹介します。これは VUCA の状況とともに、私たちにウェルビーイングの重要性を気づかせたものです。1990 年代から現在にかけて世界中の教育に大きな影響を与えています。その一つが国際的な学力テストの普及です。

1995 年には TIMSS(国際数学・理科教育調査)が開始され、小学校 4 年生と中学校 2 年生の数学と理科の理解度を測定しました。このテストで日本の子どもたちの学力が世界トップクラスであることが分かり、日本の「授業研究」が国際的に「Lesson Study」として注目されるきっかけとなりました。OECD は 2000 年から PISA(生徒の国際学習到達度調査)を実施し、15 歳前後の生徒の数学、読解、科学のリテラシーを測定しています。日本でも PISA の影響を受け、2007 年から全国学力・学習状況調査が復活しました。これは小学校 6 年生と中学校 3 年生を対象に、国語と数学の学力を測り、理科は 3 年に 1 度、英語は 2019 年に一度行われました。このような全国学力調査は日本だけでなく、カナダやオーストラリア、アメリカ、フランス、イギリスなど各国でも実施されています。



これらの学力テストの結果、各国政府や自治体は、国語、数学、(時々)科学の成績向上に教育上の努力と投資を集中するようになりました。これにより、国家間、地域間、学校間のランキング比較と競争が激化し、標準化されたテストへの対応が教育の目的と化してしまうという問題が生じました。子どもたちを育てることよりも、テストで良い点を取らせることが目的になってしまうのです。この状況の中で、子どもたちの本来のウェルビーイングが置き去りになってしまいう問題が見えてきました。これは、新型コロナウイルス感染症が私たちに教えてくれたことでもあります。

さらに、GERM は特定の教科の学びに焦点が当たりすぎているという問題があります。教育学者のガート・ビースタは、この「学習化(Learnification)」という現象に警鐘を鳴らしています。何でもかんでも「学び」にすることで、「学習」という言葉が個人主義化しやすくなります。本来、学習は人との関わりの中で起こり、新しい経験として現れるものですが、GERM の状況では、どうしても個人の点数や学校・地域の比較に終始し、個人化が進んでしまいます。ビースタは、教育のプロセスや実践における「関係性」の重要性への関心が薄れていると指摘し、教育の 3 つの目標である「有能化(Qualification)」「社会化(Socialization)」「主体化(Subjectification/Agency)」をしっかりと見ていくべきだと提唱しています。

グローバル教育改革運動 GERM

2、3 の特定教科(国語・算数数学ときどき科学(理科))の

学びに焦点化

学習化 Learnification という問題提起 (Biesta, 2010)

「学習」という言葉は個人主義化しやすい＝GERMもまた学習の個人主義化を助長してしまう
→教育そのもののプロセス、あるいは教育実践の中での「関係性」の重要性への関心を減らす

→教育の 3 つの目標：有能化・社会化・主体化の重要性

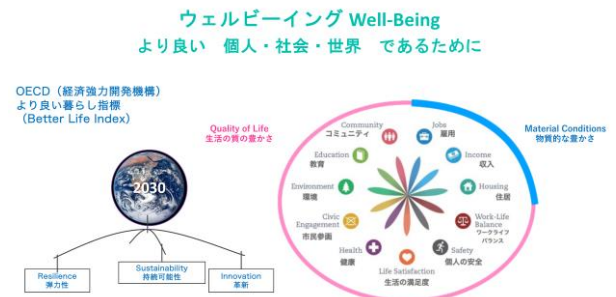
Biesta, G. J. J. (2010) Good education in an age of measurement: Ethics, politics, democracy. Boulder, CO: Paradigm Publishers

VUCA の状況と GERM の影響が重なる中で、私たちは「子どもたちのウェルビーイング」に真剣に目を向けるようになりました。不安定な VUCA の世界で、子どもたちは本当にウェルビーイングな状態なのか。標準化されたテスト対策に追われる中で、子どもたちは本当にウェルビーイングな状態なのか。そしてコロナ禍で露呈した姿です。ウェルビーイングの時代がようやく到来しました。

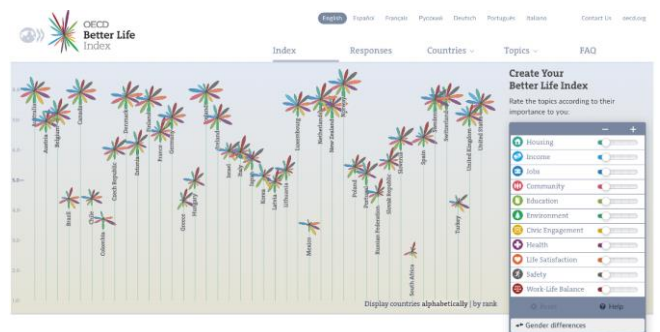
コロナ禍では二つの大きな課題がありました。一つは「ステイ・ホーム」です。子どもたちは5月末まで登校自粛を強いられました。宿題を出す、オンラインやインターネット配信、テレビ放送を活用するなど、様々な対応が求められました。福井県では地域放送局が教育委員会と連携して学習支援を行った例もあります。学校再開後もソーシャルディスタンスが求められ、分散登校や共同学習、休み時間の交流が制限され、学校行事も縮小されました。これにより子どもたちは大変つらい思いをしました。例えば、家で一人で学ぶことの困難さ、保護者のサポートが得られない、デジタル機器へのアクセスができないといった問題があり、孤立し苦しんでいる子どもたちの姿が見られました。多すぎる課題や宿題に追われ、パンクしてしまう子どもたちもいました。また、重いランドセルを背負い、先生との関係に悩み、一発勝負のテストや受験に不安を覚える子どもたちの姿も、「イールビーイング」な状態を浮き彫りにしました。これらは決して成長や学習に適した状態ではありません。



このような状況の中で、ウェルビーイングが非常に重要視されるようになりました。OECD は「より良い暮らし指標 (Better Life Index)」を作成し、ウェルビーイングを測る 11 の指標を定義しています。雇用、収入、住居といった物質的な豊かさだけでなく、ワークライフバランス、健康、市民参画、教育、コミュニティなどの生活の質 (Quality of Life) に関する 8 つの指標も含まれます。これら 11 の指標を総合的に見てウェルビーイングを評価します。



OECD の「より良い暮らし指標」で日本を見ると、経済大国でありながら、ウェルビーイングの点で改善の余地があることがわかります。特に「住居」の狭さと「市民参加意識 (Civic Engagement)」の低さが顕著です。市民参加意識は投票率などから算出され、日本は他国に比べて投票率が非常に低いのが現状です。これは社会をより良くするための行動を起こす力の表れであり、教師全体で共有すべき課題です。子どもたちと共に現在の政治状況や日本の未来について考える良い機会になるでしょう。市民参加意識の向上は日本のウェルビーイングにとって非常に重要です。



ウェルビーイングの考え方は、国連の SDGs や、新型コロナウイルス感染症流行時に注目された WHO のアジェンダとも関連しています。WHO も健康増進の観点からウェルビーイングの指標を明確に示しています。WHO のウェルビーイングアジェンダでは、特に心の健康と身体の健康に関する詳細な議論が可能です。

それでは、いよいよ学校教育におけるウェルビーイングについて考えていきましょう。先生方の学校、授業、そして学校全体で、子どもたちのウェルビーイングは保障されているでしょうか。子どもたちが困ったり苦しんだりしていることはないでしょうか。学校の中で子どもたちのウェルビーイングをどう高めていくか、そして先生たち自身のウェルビーイングをどう高めていくか。これらが私たち一人ひとりの具体的な活動になります。ウェルビーイングに向けた作戦を、この後の話し合いで考えていただきたいと思います。

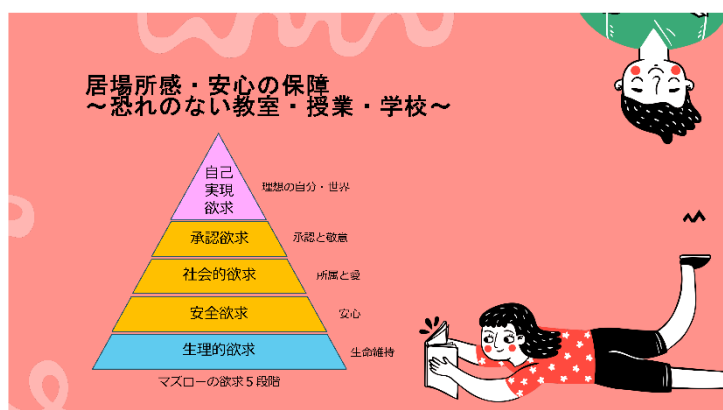
ウェルビーイングは決して最近出てきた新しい概念ではありません。学術的には 1900 年代から論文があり、1600 年代頃にはイギリスやヨーロッパで概念として現れています。さらに遡れば、ギリシャのアリストテレスの時代から幸せや幸福の概念について議論されてきました。ウェルビーイングとは「より良い状態」を指します。ウェルビーイングに関連する有名な 4 つの理論があり、これらには学校教育にも応用できるものが含まれますので、確認してきたいと思います。



ウェルビーイングの理論的枠組み

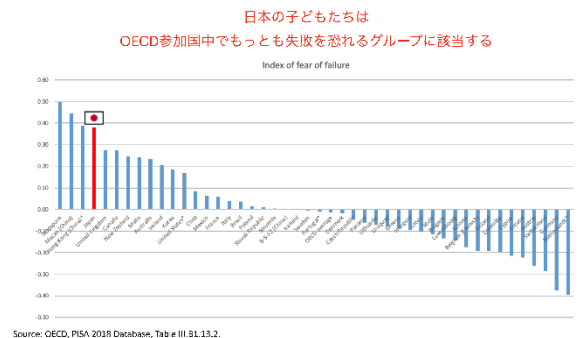
1. **マズローの欲求 5 段階説**: 心理学者のアブラハム・マズローが提唱した「欲求 5 段階説」は、ウェルビーイングの理論の中で非常に有名です。人間は 5 段階の欲求を順に満たしていくことで、最終的に自己実現に向かっていけるという理論です。
 - **生理的欲求(生命維持)**: 食欲、睡眠欲、排泄など生命維持に関わるものが最も基本的な欲求で、これが満たされることで次の段階に進めます。
 - **安全欲求(安心)**: 身体的・精神的な安全の確保。
 - **社会的欲求(所属と愛)**: 集団への所属感や他者からの愛情。
 - **承認欲求(承認と敬意)**: 他者から認められ、尊重されること。
 - **自己実現欲求(理想の自分・世界)**: 自己の可能性を最大限に引き出し、理想を追求すること。

学校教育においてマズローの欲求段階説を当てはめてみましょう。生理的欲求は満たされているとして、その上の段階はどうでしょうか。先生方の教室で、子どもたち一人ひとりの安全・安心の欲求、社会的欲求、承認欲求はどれだけ保障でき

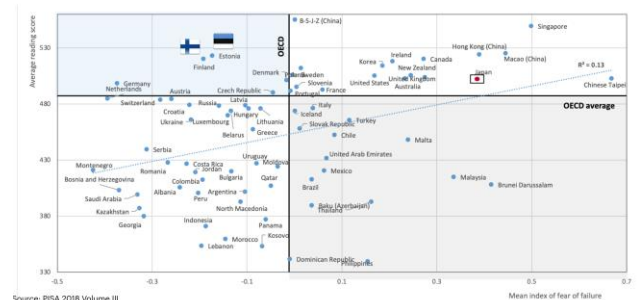


ていますか？子どもたちが安心して学べる教室になっていますか？クラスや学校、クラブに所属感を持ち、愛情や愛着を感じられていますか？先生が子どもたちを認め、敬意を持っていますか？子どもたち同士で認め合い、敬意を持つ学級になっていますか？これらの視点から自分の学級を考えることができます。もし満たされていない部分があれば、それが子どもたちにとって「イルビーイング」な状態である可能性があり、改善すべき点が見つかるでしょう。子どもたちが自己実現に向かっていけるよう、このような欲求を満たすことが大切です。つまり、「恐れのない教室」を作ることが求められます。

OECD の PISA2018 年調査データでは、日本の小中学生は OECD 参加国の中で最も「失敗を恐れる」グループに属しています。シンガポール、マカオ、香港、そして日本が上位です。シンガポールでは学力に応じた学校振り分けシステム（トラッキング）があり、一度進路が決まると変更しにくい構造があります。日本も受験社会で一発勝負のテストが多いため、子どもたちが失敗を恐れてしまうのは理解できます。本来、学校はたくさん失敗して学ぶ場であるにもかかわらず、子どもたちは失敗を恐れてしまっている可能性が高いのです。しかし、OECD のデータは、失敗への恐怖が学力向上とほとんど無関係であることを示しています。失敗を恐れる国（日本）も恐れない国（フィンランド、エストニア）も、リーディングリテラシーのテストで高い成績を収めていることから、恐怖を煽って学力が高まるわけではないことがわかります。このような提言がなされています。



PISA Reading Literacy（読解力）で同水準のフィンランド・エストニアの子どもたちは
日本の子どもたちよりも失敗を恐れていない



「恐れのない教室」という点では、「心理的安全性(Psychological Safety)」という概念が重要です。ハーバード・ビジネス・スクールのエイミー・エドモンドソン氏が提唱したもので、彼女の研究は「Fearless Organization(恐れのない組織)」、つまり組織の中にどこに恐れがあるかを分析し、それを取り除くことを提唱しています。これは学校でも応用でき、子どもたちも多くの「恐れ」を感じていることが見えてくるでしょう。この概念は非常に重要です。

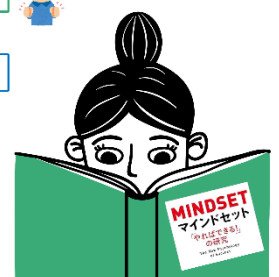
2. **成長マインドセット(Growth Mindset):** 世界中で注目されている「成長マインドセット(Growth Mindset)」もウェルビーイングにとって重要な考え方です。成長マインドセットとは、「自分自身の基本的な資質は、自らの努力によって成長させることができる」という強い信念のことです。子どもたち

成長マインドセット

自分自身の基本的な資質は、自らの努力によって成長させることができる という信念

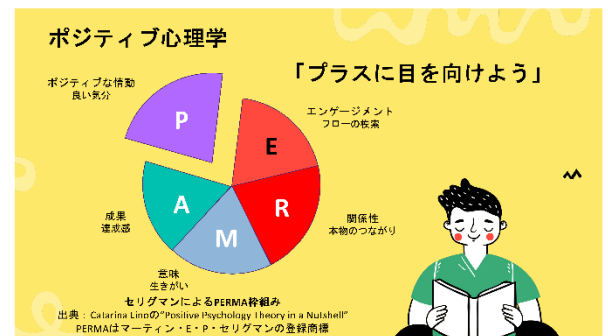
自分自身の基本的な資質は、いくら努力しても変わらない という信念

固定マインドセット



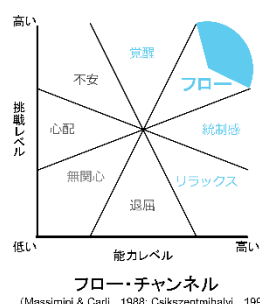
の成長マインドセットを高めることは大切ですが、単に褒めるだけでは不十分であり、家庭や学校、社会といった環境との関係性も考慮する必要があります。その逆は「固定マインドセット(Fixed Mindset)」で、「いくら努力しても変わらない」と思ってしまう状態です。成長マインドセットを高めるには、励ますことが大切ですが、単に褒めるだけでは不十分な場合もあります。子どもの根本的な問題が心の状態だけでなく、家庭環境や社会環境にある場合も多いため、子どもたちの状況を丁寧に観察することが重要です。学校や家庭の生活、人との関わりが、子どものマインドセットに影響を与えます。

3. ポジティブ心理学(PERMA): 福井県でも導入が進んでいる「ポジティブ心理学」もウェルビーイングの重要な考え方です。心理学者のマーティン・セリグマンが提唱した「PERMA モデル」は、ウェルビーイングを構成する5つの要素を示しています。



- Positive Emotion(ポジティブな情動・良い気分)
- Engagement(活動への没頭、フローの模索)
 - 特に「フロー(Flow)」とは、活動の挑戦レベルと自己の能力レベルが釣り合った時に生じる「最適経験」であり、没頭、自己統制感の向上、創造性の発揮など、学習にプラスの効果をもたらします。子どもたちがフロー状態に入れるような活動をデザインすることが、学校や教室での大きな挑戦の一つです。フロー状態の時には、子どもたちは非常に集中している様子が見られます。逆に、不安や心配を抱えていたり、無関心になっている場合は、この均衡が崩れている状態です。無関心な状態になると、人は別の挑戦を探し始め、問題行動に繋がることがあります。これは逆フローが起きている状況と言えます。
- Relationships(関係性・本物のつながり)
- Meaning(意味・生きがい)
- Achievement(成果・達成感) ポジティブな側面に目を向けることで、より豊かで良い人生を送ることができます。

感情 (EMOTIONS)

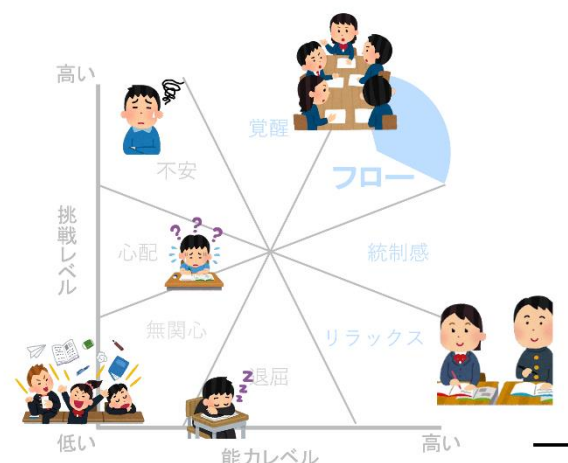


活動の挑戦レベルと自己の能力レベルが高い値で均衡したときに**フロー(最適経験)**が生じる。

➤ フローの「効力」

- 活動への没入
- 認知範囲の拡張
- 思考の柔軟化
- 自己統制感の高まり
- 創造性の発揮
- 時間感覚の変化

子どもたちの
学びへの参加や質に
プラス効果



4. 社会情動的学習 (SEL: Social Emotional Learning):

「社会情動的学習 (SEL: Social Emotional Learning)」は、自己管理、自己認識、責任ある判断力、関係構築スキル、社会意識という5つの核となる能力を育む学習です。最近注目されている自己調整学習もここに含まれます。映画『インサイド・ヘッド』のように自分の感情を色分けして調整する取り組みもウェルビーイングの枠組みで行われています。自己調整、自己管理、自己決定が重要です。内発的動機づけを高めるには、「自己決定」「有能感」「関係性」の3つの要素が鍵となります。つまり、子どもたちが自ら学習課題や方法を決定する機会を保障し、自分に能力があると実感できる機会を提供し、他者と関わる機会を保障することが大切です。

自己管理・責任ある判断力
自己決定の保障、有能感の価値づけ、関係づくり

自己決定と有能感と関係性

(Deci & Ryan, 2002)



- ☆子どもたちが**自己決定できる機会**を保障する
ex. 学習課題の決定、学習方法の決定、読く相手の決定など **★控え込まない、任せる**
- ☆子どもたちが**「自分に能力がある」と実感できる機会**を保障する
▶対話 声かけ、励まし、意味づけ、価値づけなど
- ☆子どもたちが**かかわり合う・他者とかわる機会**を保障する
▶対話 ペア・グループ学習、コの字、縦割り、校外、保護者の学習参加など

しかし、OECD のデータによると、日本の小中学生は学校生活の満足度は高いものの、自己決定の機会が OECD 加盟国中最も少ないことが示されています。子どもたちが自分たちで決定できる機会をどれだけ保障できているか、これはウェルビーイングの観点から考えるべき重要なヒントです。

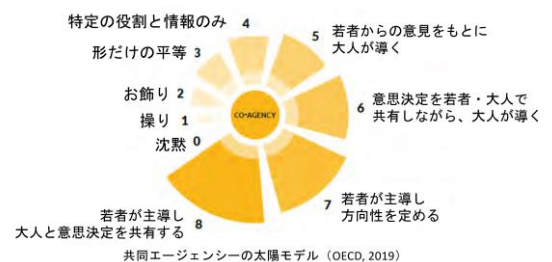
子どもたちと教師のウェルビーイングを高める

これらの理論を踏まえ、子どもたちと大人が共にウェルビーイングを高めていくことが重要です。

1. 子どもたち・若者たちとの学習パートナーシップの再考: OECD の「共同エージェンシー

の太陽モデル」は、子どもたちが主体性(エージェンシー)を発揮する際に、大人との関係性をどのように築くかを示しています。このモデルは、子どもたちや若者が大人と協働することで、いかに輝いていけるかを表しています。逆に、レベル0から3では、子どもたちが主体的に行動できず、大人に利用されている状態を示しており、強い主張が込められています。

子どもたち・若者たちとの
学習パートナーシップを再考する



す。この枠組みの中には**「The light is brightest when we shine together. (光は、私たちが共に輝くときに最も鮮やかになる)」**という、子どもたちから大人への、共に輝きたいというメッセージが込められています。

2. 教師自身のウェルビーイングを高める: そして、先ほどご紹介した「ティーチングコンパス」では、教師自身の自己概念も重要視されています。コンパスの中心には「錨」のマークがあり、「Being(どういう状態か)」「Belonging(何に属しているか)」「Becoming(どうなりたいか)」という3つのBが示されています。これは教師自身がウェルビーイングを探求し、高めていくことの重要性を示唆しています。

この後、皆様には子どもたちと学校のウェルビーイングを高めるために、夏休み明けからどんなことを始められるか、リフレクションを進めていただきたいと思います。

わたしたち自身の エージェンシーを見つける

Q 子どもたちと学校のウェルビーイングを高めるために
明日からどんなことをはじめられそうですか？

Co-Reflection for Tomorrow

